

---

## 書 評

---

### **Roland H. Bainton, Behold the Christ, A Portrayal of Christ in Words and Pictures, Harper & Row, 1974**

ペイントン教授については紹介の要はない。多年イエール大学にあって教会史を講じ、マルチン・ルター研究では、「われここに立つ」の名著をあらわし、引退後も、「エラスムス研究」「キリスト教史」(3巻)、「宗教改革の女性たち」(2巻)などをつぎつぎに出版している。これらの多くは、邦語に訳出され、出版されているのでわが国でも馴染み深い碩学である。1967年には、同志社大学の客員教授として広い語学力と文化史的色彩を豊かに備えた講義をされたことは記憶に新しい。

わたしは、1973年の秋から冬にかけて4カ月ほどイエール大学の客員教授としてニューヘーヴンに滞在していた。ペイントン教授は毎朝8時には神学校の食堂に来て朝食をとり、愛用の自転車で大学の図書館にゆき、夕方になると又食堂に来て学生たちと談笑しながら夕食をとることを日課のようにしておられた。本年度80才になられるが、とうていそんなお年に見えなかった。「自分はまだ引退する年でもない。求められれば、世界中どこにいても講義をしますよ」と元気そうに語っておられた。

クエーカー教徒であるペイントン教授は、ベトナム戦争がエスカレートしたころ、学生たちと一緒にデモに参加するような平和主義者でもあった。

73年の秋、教授は、本書の執筆に専念しておられ、しばしば、わたしのアパートに原稿をもって来ては説明をされ、意見を求められた。そんな関係で、わたしが推薦した第三世界のいくつかの作品も本書には含まれており、キリスト教美術のスコープをひろげている。

本書は、降誕から受難、復活、審判に至るイエスの生涯と働きを初代教会から現在までの2000年のキリスト教史を通してえがいていたものである。250点の作品が白黒印刷で含まれており、2000年のキリスト教美術の歴史的資料を豊富に提供している。ペイントン教授自身も器用にさし絵を画いてそれぞれの時代における考証の助けをしておられる。ただあまりにも教授の筆先が器用なため、どこまでがオリジナルで、どこからが補筆なのかわからない点がある。250点の図版の印刷の鮮明度は必ずしも優れたものとは言い難いことは残念である。

ペイントン教授は序文において本書の意図についてつぎのようにのべている。

「本書は、ときとして宗教に関心をもっている美術史家たちのために書かれたものでなく、自らの信仰をさらに深く理解し、他の人々に自分の信仰を語るにあたって、美術作品が深い意味をあらわすものであると考えているキリスト者のために書かれたものである。」

こうした姿勢は、本書の特色であると同時に問題点でもある。それは、キリスト教美術を信仰者の自己表現の手段とみなすものである。そこでは、信仰の契機が重要視され芸術

の形式や、質的側面は従属的なものとみなされている。著者はこうのべる。

「宗教的絵画の領域では、作家の職人としての技能は、それ自体、中心的な位置を占めるものではない。」(31頁)

この言葉は多少の説明を要する。ペイントン教授は、作家の技術的な側面を決して無視したり、軽視したりしているのではない。しかし、あくまでも宗教美術において中心的に重視されるべきものは、作者の宗教的体験であり、それは、自己の技巧を誇るものでなく、人間の文化を誇示するのではなく、それらを捧げて、より高い目的のために仕えようとする姿勢である。このことは、美術の世界における技術の錬達を否定するものではなく、むしろ文化の自己中心性を否定し、技術をみがき心をこめて神奉仕のためにそれを役立たせることを意味している。

それ故に、東方教会のイコンを描いた作家たちが、長い瞑想のなかから同じようなイメージを何度も繰りかえしてえがき、ルネサンスの芸術家たちが、自己の華やかな技術のとりことなる誘惑とたたかったのである。著者は、宗教的芸術と世俗的芸術を区別するものは、宗教的美術は美そのものを目的としないことにある(30頁)とのべている。これは、きわめて重要な指摘である。

さらに、作家の宗教的体験をあまりにも重視して技巧を軽んじてよいというのではない。「わたしが好むのは、単純な線をもって描きながらも、そこにあらわれたもの以上のものを象徴しているような作品である。そのような作家の代表者はレンブラントであるとわたしは思っている」(32頁)

ペイントン教授の文章は流麗であり文化史的な豊かさ zu 富んでおり、美術史とキリスト教史の学際的対話を随所に展開している。

いささか不満な点をのべるならば、図版の写真印刷のなかにはやや不鮮明なものがあることと、美術の作品としての力よりも神学的内容の方が重視されていることがあげられる。いずれにしても、老大家の熟達した筆による楽しい作品であり、又教えられるところの少くない書物である。(竹中正夫)

**Richard W. Taylor, Jesus in Indian Paintings,  
The Christian Literature Society, Madras, 1975, p. 184**

著者リチャード・W・テラーは米国の合同メソジスト教会から派遣されて長く印度で働いている宣教師である。彼は現在、バンガローにある宗教社会研究所においてM・M・トーマスの協力者として研究活動にあたっている。本書は、同研究所の「インドにおける信仰告白シリーズ」の第11号として出版されたものである。本シリーズは、インドの社会的・文化的状況におけるキリスト者の働きや神学者の思索をテーマごとにまとめたもので、現代のアジアの課題を反映している。たとえば、そのなかには、Goreh, Chenchiah, Chakkarai などのインドの神学者や E. V. Mathew のような弁護士や、Stanley Jones のような宣教師が含まれている。

序文のなかでテラーは右のシリーズの企画にあたってインドの美術とキリスト教信仰についての書物が入るように提案したところ、彼にその責任がかかって来たことをのべているが、このテーマについては彼が適任者であることは確かである。私自身もアジアのキリスト教美術の調査をしたとき、インドの状況については、マドラスの基督教大学のジョーゼフ・ジェームスとテラーの意見が最も参考になったのを憶えている。

本書はつぎの5つの章に別れている。短い(1)序論ののち、(2)インドの歴史的キリスト教美術として16世紀のポルトガルの美術の影響を受けたモンゴル美術の背景が詳細に報告されている。この章は、従来に知られていなかった資料を用いて書かれており、この研究の中の特色と言える。(3)ついでベンガル学派とその後継者たちの紹介がなされ、(4)さらに、現代の作家たちが論述され、(5)最後に装飾的な美術や礼拝儀式に用いられる用具などにあらわされた作品が紹介されている。

作品の写真図版は、いずれも白黒で16枚ありその質は必ずしも鮮明とは言えない。しかし、書物自体ペーパー・バックで12.50ルピー(約750円)という廉価で広い普及を意図していることが理解される。

本書の特色としては、つぎの3点があげられる。

第1、さきにものべたようにモンゴル文化と、キリスト教文化の接触がインドの美術作品にあらわれていることが刻明に記述されている。これは、文化と宗教の相互交錯の興味深い実例である。

第2に本書においては、戦前・戦後における有力なインドのキリスト教美術家の紹介がなされており、その作風、作家の背景などが論述されている。主な作家だけでも25人を越えている。著者は自らの足でこれらの作家たちを訪ねじかにあって、資料を集めたものが少ない。貴重な記録である。

第3に、キリスト教美術の敘述を通して著者は、インドにおけるキリスト教神学に貴重な示唆を与えている。

著者は、つぎのような確信をもっている。

「もしも、芸術が与えられている人間状況における応答であるとするならば、インドにおけるキリストについての絵画は、現実における深い奥義に沈潜しそれをいくらかでも描き出すものであると私は信じている。」(同書171頁)

ここでテラーは、3つのきわめて示唆にとむ問題提起をおこなっている。

その1つは、the hyphenated-Christian という言葉である。之は、従来から理解されて来た正統的なキリスト理解から逸脱、ないしゆがめられたキリスト理解をなすキリスト者のことを意味している。たとえばナチに迎合したキリスト者の例などはその悪しき例である。それに対し、従来から白人が考えていたキリスト理解に対して黒人が理解し表現したキリストはその良き例としてあげられる。インドの状況のなかでインド人キリスト者の理解し、表現したキリストを積極的に評価しようとするものである。

第2の点は、インドのキリスト教美術の提示する土着化の特色をあらわす概念としてサンスクリット化(Sanskritization) ということを指摘していることである。これは、インド

における宣教師運動の働きは西欧化ならびに非民族化 (denationalization) の結果をもたらしたという批判的反省に基づいている。そして、「サンスクリット化」とは、インドのキリスト者がインドの文化の主要な流れとしてヒンズー教の豊かな伝統と地盤のあることを認め、そこからインドにおけるキリストのイメージを把握し表現しようとするものである。それはあくまでも、折衷的帰結ではなく、土着の試みの出発点として考えられるべきものである。

第3の点は、キリストのイメージがキリスト者でない芸術家たちによって力強く描かれているという指摘である。そうした例としてJ・ロイ (Jamini Roy)、パニカー (Paniker) などがあげられている。このことは、キリストの働きがキリスト者でない芸術家たちを通して顕証されていることを示している。M・M・トーマスはその主著 *Acknowledged Christ in Indian Renaissance* においてインドのヒンズー教の哲学者や思想家の中にキリストが積極的に評価されていることを肯定的に論じているが、それと相い通ずる分析と主張がインドの芸術の領域においてなされていると思う。

これらの3つの点はキリスト教美術の領域のみでなく、広くアジアの神学形成にあたってきわめて重要な問題提起であると思う。(竹中正夫)

## 編 集 後 記

○夏休みに入り、今年もまた京都は連日30度を越す京都特有の暑さでうだっております。皆様の所はいかがでしょうか。暑中お見舞申し上げます。

○前号にて申しましたように、毎年2回定期的出版できる経済的な見通しがたちましたので、皆様のお手許に40巻1号をおとどけ申し上げます。本年度冬には2号をと考えております。

○なお、予告のとおり40巻2号は山崎亨教授古稀記念論文集となり、執筆を現在依頼中です。

○昨年スイスに在外研究で一時病気を現地でなさいました飯教授は帰国時には非常に元気になられ、編集委員としての職務に復帰されました。

○今回退職されアメリカ病氣療養中のロイド教授がまだ京都におられた間に草稿をつくり、今回夫人が他の資料の中から発見して、きれいにタイプされた原稿を送ってられました。なつかしいわれわれのロイド教授の労作ですので、原文のまま掲載することとしました。最近はもう字もかけるほど、だいふ回復されたようです。いつまでもお元気でいられるように祈ります。

○その他の御執筆の先生方、特に、休み中出版に努力して下さった研究室の方々にお礼申し上げます。

(編集委員 樋口、飯、橋本記)